雪たねニュース
東北版 №272
2000・⑦

今月の主な目次

○トウモロコシ後作のイタリアンムギ類の不耕起省力栽培
○トウモロコシの刈取り適期の見極め方
○除草剤を上手に利用した効果的な草地更新法
○北上編・優良酪農家は使っています「インスパイアー」
○スノーグローエース（青森県の事例紹介）ニンニクへの利用法と効果
○牛舎はくさくありませんか
○ダイコンの新種紹介と栽培の注意点

時の話題

魅力あるふん尿処理をめざして！

ふん尿処理は経営上の大きな課題となっています

搾乳牛は、牛乳とふん尿を毎日、毎日、産出します。育成牛や乾乳牛、そして肉用牛は、乳は出しませんが、ふん尿は毎日かならず産出します。

これらのふん尿を、経営上の重要な資源と捉える人と、じゃまもの・やっかいものと捉える人とでは、経営上、大きな差がついてきます。今後は、前者のスタンスで課題解決にあたりたいものです。

一　ふん尿には、お金がかかっています

牛に与えたエサは、消化・利用され、残りがふん尿として排せつされます。エサの消化性は、可消化養分総量（TDN）で示され、乳牛用配合飼料では七〇～七五％、自給飼料では六〇～七〇％程度と考えられ、給与ボリュームでは、これらの逆数、二五～四〇％がふん尿に回ったことになります。

乳配も自給飼料（購入粗飼料）も、経営上は飼料費に金額合算されており、その三〇％程度は、ふん尿に回ったと見てよく、半端な金額（原価）でないことがわかります。

二　ふん尿の価値を落とさないために

排せつされた直後のふん尿が、栄養的に優れることは、一概に喜べることではありません。むしろ、その前段では、エサの利用効率をいかに高められるかに集中すべきです。一方、排せつされたあとのふん尿は、その扱いひとつで、その価値は低減の方向に向かい、ひどい場合は、環境への汚染源にもなってしまいます。〝野づみや素掘り〟の改善が必要なのもそのためです。

前段でのエサの利用効率の改善と、ふん尿の発酵効率の改善の双方に役立つ資材として、当社では、微生物混合飼料（スノーエックス）を取り扱っています。

微生物混合飼料ですから、給与量も極少量です。牛体の消化管はもとより、牛床・堆肥舎、そして圃場へと、その増殖・定着が進み、有用微生物の循環系が形成されてゆきます。

こうなりますと、牛舎も堆肥舎も堆肥も、嫌な臭いがしなくなります。もちろん、この間、エサの利用効率も改善されています。これが、私たちの提案する、魅力あるふん尿処理の流れです。

三　ふん尿（堆肥）の商品価値を高める

品質の良い堆肥が圃場へ還元されますが、面積に対し飼養頭数が多い場合、システム化された商品としての販売が得策です。東北地域は、日本で最も多様性に富む農業が展開され、良質堆肥の供給とその上手な活用がともなえば、更なる発展が約束されると思います。北研では、寒高冷地型『沃野』を開発し、モデル実践を行っています。興味のある方はぜひお出かけ下さい。

（研究本部長　山下　太郎）